さよならプレイデイズ

日之陰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さよならプレイデイズ

【Ｎコード】
Ｎ７１０４Ｆ

【作者名】
日之陰

【あらすじ】
明日から本格的に会社勤めの日々が続くことになる。もし、新たな社会人となる「僕」と、それまでの「僕」に明確な境界をつける日があったとしたら――。ノスタルジックな一日がいま始まる。

今日は遊ぼう。
ひとかけらの悔いも残さないぐらい遊びまくろう。

◆

運動場には僕を含めて四人がいた。みんな男だ。
小学生くらいのかわいらしい男の子と、中学生くらいのあどけない少年と、高校生ぐらいの落ち着いた好青年。就職口を獲得して間もない僕は、そのグループ内で最年長だった。

「名前？　ボク、ジンだよ。小学校三ねんせい！」
「あれ？　オレもジンっての。中二」
はじめに自己紹介を交わしたとき、小中学生二人はそう名乗った。
高校生の子は、すぐには口を開かなかった。しばらく口元に手を当て思案する素振りをみせた後、「ふ～ん」と得心したような笑みを僕に向けた。
「俺は高校二年だよ。『イニー』さんって呼んで」
意味が分かる僕は、思わず噴き出しそうになる。他の二人は互いに首を傾げ、「変な名前！」と端的な感想を述べた。
「おっちゃんは？」
最後に僕にお鉢が回ってきたとき、自分も名乗るべきかどうか逡巡した。
「僕はね……」
嘘は言いたくなかった。さりとて全てを明かしたくもない。右手で口を覆いながら、さてどう言ったものかと言葉を選ぶ。
「あ～僕はね……実は……君達と遊べるのは今日だけなんだよ。明

日からハードな会社勤めが始まるんだ。毎日毎日馬鹿みたいに働くから、遊べる時間は無くなっちゃうんだよ。そりゃ、休みの日もあるだろうけど、そういう日は休養にあてることになるだろうから」
「そうなんだぁ……」
「だからね。僕は名前を言わないんだ。もう二度と会えないから。僕を呼ぶときはそうだな、さっきみたいに『おっちゃん』でいいよ『おっちゃん』で」
言われ続けるよりは開き直っておく方がましだもんね。別に自分の顔に若々しさの自信がない訳じゃないけどね。

ジンが二人いては呼ぶとき不便なので、小学生の方をジン、中学生の方を二番目のジンということでニンジンと呼ぶことにした。
「何だよニンジンって」
「う～んここは格好よくジンツーって呼びたいとこだけど、『陣痛』って響きに重なって何か嫌だし。それに好きっしょ？　ニンジン」
「好きだけどさ」
「じゃあニンジンで」
「ニンジン！」
ジンが面白げに笑ってニンジンを指差した。

そうして互いの呼び名が決まったところで、「中当て」で遊ぶことになった。広い運動場にボールがポツンと置いてあったのをジンが見つけて、そのまま彼の提案を通したのだった。
「ナカアテって何だい？」
無論、僕は知っていたけど、最初に確認のため訊いてみた。
「うぇーっおっちゃん、中当ても知らないのぉ？」
こいつは無知の権化かと言わんばかりにジンが叫んだ。彼の説明によると中当てとは早い話、少人数でやるドッヂボールのことで、

つまりは僕の知ってる中当てと同じだった。
「あぁそれなら知ってるよ」
「じゃ、やろやろ！　ボク外野ね！　えいっ！」
情け無用問答無用、ジンの放ったボールが僕の腹に直撃した。
「ごほっ」
「はいじゃあ、おっちゃん外野ねっ」
ジンは小学生特有の自分勝手なノリで話を進めると、前方へエネルギッシュに走っていった。ううむ、まさかこんなに元気だなんて。

いつの間にやらグラウンドには長方形の白線が引かれ、他の二人は既に配置についていた。　一連のやりとりを眺めていたらしく、にやにや顔をこちらに向けている。
「この……みんなして年長者をバカにしてっ！」
僕はボールを拾い上げると、内野の二人におもっくそ投げつけた。
ボールはあらぬ方向へ飛んでいき、反対側の外野の頭上を越えていった。
「あら？」
「バッカへったくそ！」
対岸担当の高校生イニーは、面倒くさそうにボールの後を追っていった。

しばらく楽しい中当てが続いた。投げて避けて受け止めて、外野と内野がコロコロ入れ替わった。予期せず汗がしたたる。集中している競技は、体力の消耗を忘れさせるものだということを久しく思いだした。小学校の昼休みの、あの楽しい時間だった。
言わずもがな一番下手だったのは僕で、時間とともに十年来の勘を取り戻した後でも、ジンコンビにはからっきし及ばなかった。高校生のイニーも僕同様、ぎこちない動きからして憂き目にあうと思

われたが、投げるボールは一番パワーがあって痛かった。イニーはチビッ子達にも容赦なくその球を放っていたが、ジンコンビにはカスリもしなかった。
「俺が投げるときだけ逃げてばっかじゃん」
「悔しかったら当てりゃいいじゃん」
「高校生なのに『ドッヂ』の意味も分かんないのププ」
「くっそ、俺、視力いい方なのに」
するとジンコンビは、二人そろって自分も視力がいいと言い放った。僕はその掛け合いを微笑ましく見守っていた――ら、まだ最年長の貫録もあったが、残念ながら一番にスタミナが切れていて呼吸を整えるのに必死だった。
「そ、そろそろ休憩しよ。も、もうきつい」
かつてあった運動能力のプライドはどこへ行ったのやら、とかく歳月の経過は残酷だ。

あの日の昼休みに帰れた。表には出さなかったが、胸が心地よく締め付けられているようだった。
あの頃の僕はいつまでも疲れ知らずで、誰にも教わらずに身体を動かすことの本質を享受していた。
今さえも変わっていなかった、楽しい、という曇りなき感情を揺らすことなく。

ジンはまだ物足りなそうだったが、もうスポーツは飽くほど楽しんだので、今度は屋内で遊ぶことにした。
男四人が集まった部屋はなかなか窮屈だった。
だがその狭さがいい。部屋内を移動するとき、座っている他の誰かをまたぐ。それを邪魔がられる。そんな体験など何年ぶりだろう。
お盆によそったお菓子とグラス半分量のジュースを口にしながら、

自然な流れでテレビゲームをすることになった。
僕の、彼らくらいの世代だったら、友達同士で家で何をするかなど当たり前過ぎた。
「スマブラやろうぜ！」
「桃鉄やろうぜ！」
「スーファミのマリカがいいな」
「うちのスーファミアダプタ弱いからヤバイよ」
ゲーム機が引っ張りだされ、あっという間に準備し終わる。
電源が入った。こうなるともうプレイヤーの誰かがストップをかけない限り終わることはない。その時がくるのはずうっと先の先。

持つ物がボールではなく、コントローラーであれば僕も対等、いやそれ以上に渡り合えた。長年蓄積されたテクニックを見よ！
「おっちゃん強い！」
「みんなおっちゃんを狙え！」
複数人同時参加型ゲームの強者の運命。序盤こそ勝ちまくっていた僕だったが、やがて皆に狙われ袋叩きされる羽目に。
個人的に言わせてもらえば、最も家庭用ゲームに集中しやすい時期を過ごすのは中学生だ。一般的に比較するなら、小学生は年齢上どうしても操作や要領が拙くなるし、高校生はカラオケやゲーセンに行き始めるので家にこもる時間は減る傾向にある。
おまけにえらく負けず嫌いだ。中学生は半端にコドモなせいで、自分が勝つまで、納得するまでは滅多に匙を投げない。吸収力も高いことを考慮すれば、家庭用ゲーム最強世代は中学生？
という訳で、その四名で最強だった僕が負け続ければ、必然的に台頭するのはニンジンだった次第で。
「勝ち！」「勝ち！」「オレのぉ、勝ちぃ！」
小学生のジンは膨れていたが、腹いせに僕を倒しまくっていたので大事には至らなかった。僕の絶妙な手加減テクがあればこそだ。

イニーも僕同様、少しも腹を立てた様子もなく、負けた時も「うっは何だこれ、また負けちまった」とヘラヘラしたもんだった。
そのあとも色々なゲームをプレイしたが、最初の印象のせいで僕が槍玉に挙げられるサンドバッグ役になってしまった。皆してノータイムで狙い打ちしてくるもんだから、何かもう逆に意地になった。

勝って負けて、時に本気でもめて、気がつかないうちに仲直りして、「次何やる？」と言いつつ思い出したようにお菓子に手を伸ばす。
そんな時間が、最高に熱かった！
テレビ画面の前でピコピコやるのは目に悪い。体も動かさないし、ある研究によればほとんど頭も使ってないそうだ。それがどうして、僕にとっては濃密で、有意義で、疑いなく幸せな時間だった。

やがて二人で遊ぶゲームをすることになり、僕とイニーは進んで抜けた。
「なんか頭痛くなってきたなぁ。ちょっとベランダに出るよ」
「あじゃあ俺も。ちょっちそこ通るよ」
僕とイニーは一騎打ちに燃える二人を残し、ガラガラと網戸を開けてベランダへと降りた。

ゲームで上気した頭が風に当たるとすうっとして気持ちいい。小さい頃はよくベランダで休憩したっけ。で、親から「目が悪くなるから遠くを見なさい」とか言われたっけ。僕がそれを思い出して見慣れた景色を眺めようとしたその時、イニーが声をかけてきた。
「ねぇ、おっちゃん、おっちゃんは何かで遊ばないの」
「え？」

手すりによっかかっているイニーの目は、どこかしら不安を湛えていた。
「ジンがドッヂボールで、ニンジンが家ゲーだったじゃん。おっちゃんは何か提案ないの」
「んんーそうだなぁ――。ちょうど四人いるし、麻雀がいいかな。でもまだみんなルール知らないし、もういいかな、なんて。君こそ順番で言えば、何か提案を出してもいい頃じゃないか」
僕はあえて訊いてみる。
「だってパソコンとかないじゃん。それに俺、ネトゲーばっかだし」
「イニーね」
「イニーだよ」
二人で大人びた笑いを交わす。高校生のイニーは察しがいい。さすが、分かってくれた。
「なぁ」
「なに？」
「これから俺さ」
「うん」
でも分かっているからこそ、僕にしか分からない事を知ろうとして、そして僕が何と答えるのかも、理解しているに違いなかった。
イニーがふっと緊張を解いて再び笑う。
「――まあ、そうだわな。何でもない」
「うん。そっか。頑張れ」
「おう」

ベランダから戻って、僕はそろそろ帰らなければならないことを皆に告げた。
「ええっ！　もーお？」

「ごめんな。もうすぐ夜明けだしね。勘弁してくれよ」
「だってまだオレ、おっちゃんとスマブラでタイマンしてない」
「ははは。まぁ、きっとニンジンが勝つと思うよ」
「おっちゃん」
イニーが、不満をあげるチビ達を押さえつけて静かに言う。
「今日のこと、忘れんでくれよ」
その一言で、ジンとニンジンは共に僕を引き止めることが不可能だと悟り、うつむく。でもそれはほんの少しの間で。

「おっちゃん、僕たちのこと忘れないでね！」
「会社頑張ってな、おっちゃん！」

僕は玄関に立った。三人とも見送りにきている。
君達のことは忘れたりするもんか。生涯、決して忘れない。
僕は振り返り、最後の別れを笑顔で言う。

「さよなら！」

僕は勢いよく扉を開けた。
すでに空から淡い光が降り注いでいる。
決別の時は終わった。僕はこれから歩き出す。
一歩から始まる、新たな僕に。

（後書き）

読んで頂きありがとうございました。
以下、お気づきの方も多いかもしれませんが、本作品に関してだらだら補完説明をさせて頂きます。

前提が二つあります。
まず、登場人物は全て同一人物『ジン』です。
（高校生時代にハマったとされているネットゲームのハンドルネーム『イニー』は本名の『仁』を意味します）
次にこの話は夢の中の世界です（台詞『もうすぐ夜明けだ』などから）。『僕』は開幕からそれを理解しています。夢の中の世界なので、綺麗事ばっかりです。『僕』にとってのプレイデイズは楽しい思い出にしたかった意味合いもあります。

少しでもノスタルジックな気分を味わってもらえたなら幸いです。
最後までお付き合い頂き、改めてありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7104f/

さよならプレイデイズ

2011年9月6日03時27分発行